

1988

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

63年度会費払い込みのお願い

- 昭和63年度会費 3,000 円を、3 月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。
- 振替用紙は 1 人 1 枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口で備えつけの用紙をご利用ください。振替の送料は事務局負担ですので赤い振替用紙です。
会費送付先 振替番号 東京 4 - 9 1 4 0 0 日本脂質生化学研究会
- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金 2,000 円 + 昭和63年度会費 3,000 円 = 合計 5,000 円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
(事務整理の都合上、2 年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり、或は他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。
- 所属の変更、あるいは外国長期出張の際は必ずご連絡ください。

事務局 (〒173) 東京都板橋区加賀 2-11-1 帝京大学医学部第一生化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局 TEL (03) 964-1211
(内線) 2225, 2226

……………貴方の会費で運営されています

今日、お払い込みください……………

第30回研究集会発表演題の募集

① 演題の申し込み

発表15分討論5分を予定して居りますが、演題数によっては発表13分討論5分になる場合もあります。

シンポジウムは、PAFおよびリボプロテインを予定して居りますが、依頼編成をしますので原則として公募はいたしません。

申し込みには挿み込みの原稿用紙をお使いください。これは、このまま印刷になるものではありませんから、タイプでもワープロでも手書きでも結構ですが、黒で読み易く書いてください。

申し込み締切 4月5日(火)必着

② 審査ならびにプログラム編成

在京幹事、実行委員を中心に審査ならびにプログラム編成をおこない(4月8日予定)、改めて、講演集用原稿用紙をお送りいたします(4月11日予定)。

③ 講演集用原稿締切 5月6日(金)必着

[申し込み、および講演集原稿送付先]

〒173 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部第一生化学教室内

日本脂質生化学研究会事務局 宛

第30回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ

○ 会 場 : 学士会館

〒100 東京都千代田区神田錦町3-28

TEL 292-5931

○ 期 日 : 1988年6月30日(木)、7月1日(金)

○ 実行委員 : 和久敬蔵 教授,

〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐1091-1

帝京大学薬学部

○ 参 加 費 : 3,000円

○ 懇 親 会 : 6月30日研究集会終了後

懇親会参加費 3,000円

30回記念講演会

日本脂質生化学研究会の研究集会が、今回で30回目になります(創立28年です)。

それを記念して、今回の研究集会の実行委員の和久、高野両教授の肝煎りで、下記の如く記念講演会が開催されることになりました。会員外の方もお待ち合わせの上、多数のご参加をお待ちいたします。

会 場 : 学士会館

日 時 : 1988年6月29日(水) 3:00~5:30

講 演 :

1) 血小板活性化因子(PAF)

F. Snyder (オークリッジ大)

2) リボプロテインリセプター

R. W. Mahley (カリフォルニア大)

入場無料

昭和63年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を昭和63年6月30日(木)、懇親会に先だって、懇親会場に於いて開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 山 川 民 夫

- 議 題
1. 昭和 62 年度事業報告
 1. 昭和 62 年度決算報告ならびに監査報告
 1. 昭和 63 年度事業計画ならびに予算案
 1. そ の 他

以 上

昭和63年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を昭和63年6月30日(木) 正午(プログラム編成上、若干の変異があるかもしれませんが)より学士会館内で開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

- 議 題
1. 昭和 62 年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
 1. そ の 他

- 幹事の皆様には別途、ご案内を申し上げます。
- 尚、昼食代1,000円を申し受けます。

会の活動状況

① 第29回日本脂質生化学研究会・研究集会

昭和62年7月17日(金)、18日(土)の両日、徳島市の徳島県郷土文化会館内の三会場で開催された。

万一、天候の具合で飛行機が欠航になると四国は孤島ですからという実行委員山本教授の言葉が、あわや適中するかというような荒れ模様の天候で、前日の朝は路面が全面、水で覆われているという土砂降りであった。飛行機欠航かと心配したが、飛行機がゆれた、船がゆれたと話しながら会員が集って来た。

17日朝も雨模様であったが、会員の出足は順調であった。その一つの理由は、1日目、2日目とも朝に特別講演を入れたためであろう。山本実行委員の見識によるプログラム編成が良い結果をもたらしたと思われる。

研究会の発表を全部聞くことはできないし、速断はできないが、聞いた範囲、伝聞いた範囲で、日本の脂質研究のレベルは非常に高い、あるいは確実に高くなっているのは事実のようである。その進歩に、本研究会がいささかなりとも貢献しているのであろうと考える。

しかし一方で、研究会当初、比較的多くの演題の見られた領域、例えば胆汁酸や、植物脂質の演題が比較的少なくなっていることも一寸、気がかりである。演題が少なくなると、益々その領域の参加者が少くなり、討論がなくなり、討論がなくなれば演題発表の意義も薄れて来る、演題発表を見合せてしまい、その領域の演題がなくなってしまうという結果になる。これは時の流れであるといえはそのとおりであろうが、自分の専門領域でない演題発表にも参加して討論に加わり、そこから何かを得て来るという態度が必要であろう。それが、脂質という比較的広い枠で研究会をおこなっている意義であろう。もっとも、それぞれ適切な発表機関を持たれて活発な研究発表がおこなわれているのかもしれない。そうであれば、いずれ情報交流の場も考えなければいけないであろう。

山本教授、塚谷教授をはじめ、それぞれのスタッフの方々に大変お世話になった。厚く御礼を申し上げたい。

尚、第一日目の総会後の懇親会は徳島東急インで開催され、新鮮な海の幸に加えて、

阿波踊りの連まで拝見させて頂いた。山本実行委員長の踊る姿が印象的であった。多謝。

② 第29回日本脂質生化学研究会総会

昭和62年7月17日午後6時40分より徳島東急インでおこなわれた。

総会の次第および議事内容は次の如くである。

- イ 挨拶 山川会長
- ロ 昭和61年度事業報告および決算の承認を求める件 植田幹事
- 62年2月に発行された脂質生化学研究サーキュラーに掲載された61年度の事業報告につき承認を求め、野島会計監査より決算の監査報告がなされ、拍手をもって承認された。
- 62年度への繰り越し金が115万円余りとなった。
- ハ 昭和62年度事業計画および予算の承認を求める件 植田幹事
- 同じくサーキュラーに掲載された事業計画およびその裏付けとなる予算について説明し、承認を求め、拍手をもって承認された。62年度は研究集会の開催、講演集の作成、サーキュラーの発行以外に、名簿の製作発行をおこなった。
- ニ 幹事再任、新任依頼の件 山川会長
- 62年12月31日で任期切れになる幹事の諸先生に63年1月1日から向う4年間、再任して頂くことをお願いすることになった。また新たに伊藤俊洋（北里大）、大島美恵子（国立医療センター）、松原淑子（近畿大）、谷口直之（大阪大）、岡本光弘（大阪大）、渋谷 勲（埼玉大）の諸氏に幹事に就任頂くことになった。
- ホ 第30回研究集会実行委員依頼の件 山川会長
- 帝京大学薬学部・和久敬蔵教授にお願いしたい旨提案があり、拍手でお願いすることになった。和久教授より挨拶があった。

③ 昭和62年度幹事会

昭和62年7月17日(金) 午後0時50分より徳島県郷土文化会館5階会議室で開催された。

出席幹事は64名、62年度総会に提出する議案について審議した。

④ 昭和62年度在京幹事会

昭和62年12月11日午後6時より東大赤門の学士会館分館で開催された。

出席者

山川、原、野島、荒木、大橋、鈴木、赤沼、脊山、桑、赤松、児島、内藤、永井、原島、飯田、石塚、植田、和久（63年度実行委員）

- 1988年の脂質生化学研究サーキュラーに掲載する62年度の事業報告と決算、63年度の事業計画と予算を審議し、事務局案を修正決定し、63年の幹事会、総会で承認を受けることにした。
- 63年に行われる予定の第14期学会議会議員の選出について話し合われ、本研究会は13期同様会員候補は出さず、推薦人のみを出すことになり、推薦人として植田幹事を充てることにした。
- 尚、誰を会員として推薦するかは後に検討することとした。
- 64年度の研究集会の実行委員は藤野安彦氏（兵庫女子短大）、65年度は秦霞哉氏（慶応大）をお願いすることを内定した。
- 和久敬蔵氏（63年度実行委員）より63年度研究集会の日程および構想が示され意見が交された。
- 63年12月31日で山川会長、植田庶務幹事、野島会計監査の任期が終了するため、63年度の総会で64年度、65年度の会長等を選出する必要がある、在京幹事会としては、山川会長の重任を希望する旨の話し合いがなされ、山川現会長の内諾が得られ午後8時30分散会した。

⑤ 昭和62年度事業報告（62年1月1日～62年12月31日）

- 会 員 正 会 員 893名（61年度863名）
- 62年度新入会 66名
- ” 退 会 36名
- 名誉会員 9名（63年度事業計画参照）
- 賛助会員 22社（ ” ）
- 役 員 会 長 山 川 民 夫 任期63年12月31日迄
- 庶務幹事 植 田 伸 夫 ”
- 会計監査 野 島 庄 七 ”
- 幹 事 74名（63年度事業計画参照）

○ 事業 1. 第29回研究集会の開催

62年7月17日(金)

18日(土) 於 徳島県郷土文化会館

実行委員 山本尚三氏 (徳島大)

参加人員 384名

発表演題 一般演題 122

特別演題 4

2. 脂質生化学研究 29巻の発行

本文496頁

3. 脂質生化学 circular 1987年2月発行

本文 24頁

4. 日本脂質生化学研究会会員名簿発行

58頁

⑥ 昭和62年度決算報告(62年1月1日~62年12月31日)

○ 会 費 正 会 員 3,000円

賛助会員 20,000円

○ 収支決算表 (後出)

⑦ 昭和63年度事業計画(63年1月1日~63年12月31日)

○ 会 員 正 会 員 微増の見込み

名誉会員 舟橋三郎, 数野太郎, 木村雄吉, 永井諒爾, 山崎三省,
山添三郎, 原 一郎, 高橋善弥太, 大野公吉

以上9氏

賛助会員 エーザイ株式会社 株式会社東京化学同人
株式会社大阪細菌研究所 東京田辺製薬株式会社
株式会社大塚製薬 株式会社東京プリント印刷
小野薬品工業株式会社 東ソー株式会社
花王株式会社 富山化学工業株式会社
共立出版株式会社

三共株式会社 日本ルセル株式会社
塩野義製薬株式会社 藤沢薬品工業株式会社
株式会社資生堂 株式会社ヤクルト本社
住友製薬株式会社 山之内製薬株式会社
第一製薬株式会社 雪印乳業株式会社
大日本製薬株式会社 (22社)

○ 役 員 会 長
庶務幹事
会計監査
幹 事

山 川 民 夫 63年12月31日迄

植 田 伸 夫 ”

野 島 庄 七 ”

(任期63年12月31日迄)

赤松 稔, 今井 陽, 植田伸夫, 小倉道雄, 香月裕彦,
金田尚志, 日下喬史, 楠瀬正道, 児島英也, 斎藤国彦,
坂上利夫, 武内 望, 武富 保, 千田信和, 内藤周幸,
永井克孝, 野島庄七, 野田万次郎, 橋本 隆, 林 陽,
林 浩平, 原島圭二, 飯田静夫, 平山 修, 藤野安彦,
穂下剛彦, 堀 太郎, 牧田 章, 松本 亮, 村松敏夫,
山川民夫, 山下 哲, 山田晃弘, 山本 章, 蔵内百治,
菅野道廣, 秦 葭哉, 三成 脩

(任期64年12月31日迄)

猪飼 篤, 石塚稲夫, 鬼頭 誠, 小峰仙一, 矢野郁也,
山本尚三, 伊藤精亮, 石橋輝雄, 池沢宏郎

(任期65年12月31日迄)

木村修一, 塚谷博明, 高野達哉, 二木鋭雄

(任期66年12月31日迄)

秋野豊明, 荒木英爾, 安藤 進, 板坂 修, 大橋昌子,
奥田拓道, 川口昭彦, 鈴木明身, 玉井洋一, 中野益男,
西村顕治, 野間昭夫, 水柿道直, 和久敬蔵, 赤沼安夫,
猪川嗣郎, 井上圭三, 遠藤 章, 奥山治美, 小野輝夫,
脊山洋右, 野沢義則, 武藤泰敏(以下, 新任) 渋谷勲,
松原淑子, 大島美恵子, 谷口直之, 岡本光弘, 伊藤俊洋

- 脂質生化学研究 circular 1988年の発行
- 脂質生化学研究 30 巻の発行
- 第30回研究集会の開催 実行委員 和久敬蔵氏(帝京大)
- 第30回記念特別講演会 和久敬蔵氏, 高野達哉氏

⑨ 昭和63年度予算

- 会 員 正 会 員 3,000円
賛助会員 20,000円
- 予 算 表 (後出)

山川会長 日本学士院会員に選任さる

昨年、昭和62年12月、日本学士院は、学士院会員の欠員補充の選挙をおこない、山川民夫博士の学問に対する寄与、貢献を高く評価し、日本学士院の会員に迎え入れることを決定いたしました。

山川民夫博士は、本年1月12日、学士院に赴き、新入会員としての挨拶をされ、日本学士院会員としての活動を開始されました。

因みに、日本学士院は、明治12年、東京学士院として発足、同39年帝国学士院となり、所謂、大学者の集りとして日本の学術振興に大きな役割りを果して参りました。大平洋戦争後、曲折はありましたが、日本学士院と改称、文系、理系の学者150人が名を連ねて居り、会員に列することは、学問、学術の道を志した者にとって甚だ名誉であります。

日本脂質生化学研究会の会員一同、心からお慶びを申し上げ、山川会長の今後の更なるご活躍を祈る次第です。

⑨ 昭和62年度収支決算および昭和63年度収支予算表

収 入 の 部 項 目	62 年 度		63 年 度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	2,100,000	2,109,000	2,112,000
入 会 金	60,000	132,000	100,000
賛 助 会 員 会 費	460,000	400,000	440,000
講 演 集 売 上 げ	120,000	104,000	110,000
広 告 収 入	800,000	870,000	800,000
利 子	5,000	284	500
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	0	0
小 計	3,545,000	3,615,284	3,562,500
前年度よりの繰越金	1,150,474	1,150,474	1,080,230
計	4,695,474	4,765,758	4,642,730

支 出 の 部 項 目	62 年 度		63 年 度
	予 算	決 算	予 算
研 究 集 会 補 助	300,000	300,000	500,000
会 報 製 作 費	(220,000)	(248,000)	250,000
講 演 集 製 作 費	1,600,000	1,607,100	1,600,000
旅 費	160,000	70,000	20,000
郵 送 料 ・ 通 信 費	500,000	515,840	500,000
会 費 収 納 経 費	24,000	35,150	35,200
事 務 用 品 費	100,000	44,398	50,000
会 合 費	150,000	132,540	150,000
謝 金	60,000	10,000	100,000
総 会 経 費	20,000	7,500	20,000
事 務 経 費	200,000	200,000	200,000
雑 費	10,000	0	10,000
小 計	3,794,000	3,685,528	3,435,200
次年度への繰越金	901,474	1,080,230	1,207,530
計	4,695,474	4,765,758	4,642,730

(2) 名簿製作費

CARBBANK について

石 塚 稲 夫

複合糖質糖鎖の国際的なデータ・ベース作成のプロジェクトが1年半前から進行している。山川民夫会長のもとに、Klaus Bock 博士からの手紙があり、Georgia 大学の Albersheim 教授からの本プロジェクトへの協力要請を伝えてきていたが、昨年末に Sweeley 教授が来日された折にもこのプロジェクトに触れ、糖脂質関係のデータの蓄積について山川会長に協力を依頼された。昨々春の在京幹事会の折りに、私に山川会長から打ち込みの仕事を仰せつけられたので、糖脂質関係の会員の便宜のためにデータ・ベースの内容についてあらましをお伝えするとともに、資料提供などの面で御協力を仰ぎたいと思い筆を取りました。

まず Overseer の一人である Klaus Bock 博士の手紙に従って、この企画の発足の由来を要約いたします。CARBBANK と名付けられたこのデータ・ベースと、データ・ベースを動かすプログラムは、Peter Albersheim (主任教授) の指導のもとに、Scott Doubet (Univ. Georgia, Department of Energy Complex Carbohydrate Research Center = CCRC) が作成したものである。データの入力には、各国に30~40人の curator を置いて、構造の他に文献、生物起源などのテキスト・ファイルを入力してもらう。最初は、curator が試みに数個の構造を入力しCCRCに送ると、正しく入力されているかどうかを監修してもらえ、監修は1年前に発足した Board of Overseers によって行なわれる。プログラム自体を修正した方が良くと考えられた場合はその案を送ることもできる。この後、ディスクが返却され、専門領域のデータを3~4ヵ月の間に100個程入力する。以後は各 curator が年100個の速さで入力し続けるとすると、3~5年で発表されている全ての炭水化物の構造を含む完璧なデータ・ベースができ上がるという長期計画である。さしあたり、今年8月に Stockholm で開かれる 14th International Carbohydrate Symposium までには、約2,000の構造を取込んだデータ・ベースを実演することができると期待されている。

データを打ち込む役のいわゆる curator は、半年毎にデータ・ベースの新版 (version up 版) を受け取る。また、CARBBANK プログラムを無料で供給

される。Georgia 大学においてデータ・ベース構築に要する費用は米国連邦政府のグラントおよび大学、企業からの使用料によって賄われる予定である。入力の元になる一次資料はもちろん原著論文が主である。しかし、これを網羅的に集め、雑誌名、ページ、全著者名の他に、熔点、旋光度などの物性の他、NMR、UVスペクトルなどのデータの有り無しなどのテキスト文も記入するという作業は簡単ではないと予想される。世界の他の地域の curator とかちあわないように、最初に硫糖脂質やグリセロ糖脂質から入力を始めたいと考えている。

筆者の手元にある CARBBANK は version 1.2 である。日本ではかなり前から見かけることなくなくなった2Dのフロッピー・ディスクに収められているが、IBM PC/AT-コンパチ機 (カラー、512KB+ハード・ディスク) で読めと指示されている。NECのパソコンしか持たない私は、東芝のラップ・トップ LT-J-3100 と MS-DOS 3.1 を借りて動かしてみた。画面が小さく、色がつかないが一応動かすことができる (IBM 5550 では動かない)。立ち上げると、main menu には、Editor, Filer, Searcher, Program status が表示される。その中から Editor を選ぶと、CarbBank Structure Editor として、さらにいくつかのファンクション・キーに機能が割り当てられている。たとえば、F1: "create a new oligomer" を選ぶと、単糖や硫糖など付加される基の一覧表が現れる。これらは IUPAC の略号とほぼ同じ分りやすい記号である。たとえば: Gal, GalAN, GalA のようである。3, 6d AraHex, LGalHep など比較的珍しい糖も含まれている。これらのパーツに炭素数、アノメリック、絶対配位、環の構造などの情報を付記する。たとえば lactitol は: β DGalp-4DGlcO1 となる。cut and paste 機能により、すでにある構造から一部を削除したり、移動したりすることも可能であり、枝のついた大きな糖鎖構造までこの方法で入力が可能である。画面の幅は最大200 column なので、かなり大きな構造でも入力できる。Search (検索) 機能では、① 構造データから一群のレコードを選択することができる。たとえば α LFuc, -4DGal などを含む全ての糖鎖構造を表示させることができる。② テキスト (最大1,000文字) の内容により、たとえばNMRのデータがある論文だけを選択するか、著者、生物名、表題に含まれる語句などから検索することも可能である。1.2版では、40個の糖タンパク質のN-結合糖鎖の構造の図と付随するテキストを呼出すことができる。過去の検索の結果と年度は記憶させて、後で呼出すこともできる。

こういうデータ・ベースがあると、長時間をかけてCAなどの2次資料あるいは総説を何冊も図書館で通覧したり、またCASなどのオン・ライン検索で多額の費用を費やすことも無いのでたいへん便利であることは疑い無い。使用方法は比較的簡単で、詳細なマニュアルの他に、HELPで画面に説明を出すことができる。

しかし、日本特有の問題と考えられるが、IBMコンパチのパソコンを備えている研究室が少ないことが障害になる可能性が大きい。私も、PS-2は100万を越えるし、半額で買えるIBMクローンでは、他に使えるソフトが少ないので、結局IBM/9801コンパチ(1月発売のプロサイドまたは2月下旬発売予定のトムキャット)を購入し、ハード・ディスクをつけることを検討しているところである。この点はAlbersheim教授に手紙で事情を説明し、善処を依頼したところ、Doubet氏から親切な返事をいただいた。それによると、NECのCP/Mは、IBMのPC-DOSとは全く異なるOSであるため使えないことを確認し、もしCP/Mコンパチのフォーマットでプログラムを書き直したとしても、program soft code (Borland's Turbo Pascal version 4.0)を作る software compilerはCP/Mでは動かないはずであるということである。ただ、ブートできるMS-DOS 3.3は提供することです。結論としては、なるべく多くの日本の研究室にIBMコンパチ機を備えて欲しいとの希望でした。このような困難を乗り越えてこのデータ・ベースを完成させ、広く使われるようになるために、会員の皆様の御意見を願います。

昨1987年のはじめにブルガリア科学アカデミーから、今秋当地で生膜脂質に関する国際シンポジウムを行なうので出席して講演してもらえまいか、という趣旨の案内が舞いこんだ。この種のシンポジウムは近年は世界中のどこかでしょっちゅう行なわれているという印象だが、いわゆる「東側」での開催はちょっとめずらしいので、筆者はリン脂質・糖脂質等は専門でこそあれ必ずしも生(体)膜の立場で研究して来たわけではないのだが、野次馬半分の好奇心から出かけて見ることにした。行ってみると、小規模ながら活気があって楽しく、まとまりのよい集会であった。このシンポジウムのことはおそらく日本ではほとんど知られていないと思うので、この欄を借りて簡単にご紹介したいと思う。

1. シンポジウムのあらまし

あゆみ：

この国際シンポジウムは10年ほど前から3年に1度の見当で行なわれており、今回は4回目であった。正式の名称は第3回と同じくMembrane Lipids-Metabolism and Organizationで、第1回と第2回はAlveolar Surfactantであったという。ブルガリアの科学アカデミーと農学アカデミー、これは西欧・日本などの理学部、農学部大学院機構にも該当するらしいのだが、その生物化学、生物物理学部門にぞくする若手脂質研究者たちにとっては格好の研修の場であるらしい。当事者のひとり、こんども長く続けて行きたい、と語っていた。

とき・ところ：

こんどの集会は1987年9月30日(木)から10月4日(日)までの5日間、ブルガリア第3の都市バルナVarnaで開かれた。シンポジウムの正味の会期は10月1日(木)から10月3日(土)までの3日間であった。バルナは、黒海に臨む有名な観光と保養の街であるが、実際の会場は、バルナの北郊約8キロに位置するドルズバDruzuhbaの科学者インターナショナル・ハウス「ジョリオ・キュリー記念館」であった。ドルズバは緑の樹々の間にホテルやリゾート・ハウスが点在する行遊地で、この国際会館は海岸まで徒歩数分という所にあり、シンポジウム参加者はこの会館に宿泊し、時に近くの林間や海辺を散策し

つつ、同館1階の会場に通う、という仕組みであった。

ひとびと：

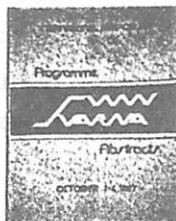
プログラムの著者名簿には100有余名が記載されていたが、実際の講演者は25、ポスター発表者は33であった。組織委員会関係者や学生等を合わせると、全参加者はおよそ80-90名位であったろうと思われる。講演者は25名の国別の内訳はフランス5、イギリス・ブルガリア各4、オランダ・ソ連・ポーランド各2、アメリカ・インド・ギリシャ・日本・フィンランド・ルーマニア各1であった。ポスター発表者33名の内訳は、ブルガリア22、ソ連6、イラク・ポーランド各1、無記載2であった。ポスター発表の関係でブルガリアが圧倒的に多かったのはうなづけるとして、講演の部で、講師が「東側」に限らずヨーロッパ一円から集まったこと、少数ながらヨーロッパ圏外からも参加があったことを、当事者はそれなりに評価している様子であった。日本からの参加は、こんどが初めてであったという。

2. シンポジウムの演題

シンポジウム講演もポスター発表とともに、生膜脂質の反応、構成および代謝の3つのセクションに分れていた。ただし、この枠組みからはみ出すような演題も少なくなかった。講演では30分ていどのおおむね総説的な講義が多く、ポスターでは原著的な報告がほとんどであった。とくに目新しい発表というほどのものはなかったが、どのセッションでも各題ごとに活発な討議と意見が交わされた。

生膜脂質の反応：

講演10題、ポスター7題のなかで、生膜での脂質とくにリン脂質、タンパク質、酵素、生理活性物質などとの反応や関係が論じられた。Koumanov 教授（ブルガリア；本シンポジウム組織委員長）らは、膜結合性のホスホリパーゼA₂やスフィンゴミエリナーゼ活性が脂質2重層の組成に依存することを述べ、Burlakava 教授ら（ソ連）は抗酸化物質が生膜の脂質やタンパク質に及ぼす影響について説明した。



写真。シンポジウム要旨集の表紙

中央の帯はグリセロ脂質の基本構造を型どったシンボル・マークで、Symposiumの頭文字を模したグリセロール骨格に、黒海の波をあらわす脂肪酸と、開催地バルナVARNAを图案化した脂肪酸が結合している。
写真：藤野

生膜脂質の構成：

講演11題、ポスター13題のなかで、生膜での脂質の造築、構造、機能などの話題が提供された。Van Deenen 教授ら（オランダ）は赤血球膜でリン脂質の不整性が維持されるメカニズムを論じ、Smith 教授（イギリス）はポリ不飽和脂肪酸の生膜構造での役割を説き、Spector 教授ら（アメリカ）は12-ヒドロキシエイコサテトラエン酸の生膜への取りこみについて述べた。筆者もこのセッションで、自然界に存在する各種の糖脂質の系列についてひとつの考え方を示した。

生膜脂質の代謝：

講演4題、ポスター12題のなかで、脂質とくにリン脂質、脂肪酸の生合成、過酸化などに関する課題が取り上げられた。そのほか、生膜脂質への薬物（抗ガン剤、ホルモンなど）の影響に関する演題なども含まれていた。筆者も座長をつとめたこのセッションで、Mazliak 教授ら（フランス）が、植物ミクロゾームでオレイン酸不飽和化にあずかるホスファチジルコリンの分子種について、年来の知見を述べていた。

3. シンポジウムの周辺

シンポジウムそのものについて記してきたが、ここで、シンポジウムをめぐる直接間接の周辺のトピックについても触れておこう。

行事のこと：

シンポジウムのソーシャル・プログラムには歓迎パーティ、ワイン・レストランへの招待、送別夕食会などが含まれていた。いずれも格式ばったものではなく、沢山の人数でないだけに、いっそう楽しく心温まる集いであった。歓迎パーティでは、きのう筑波から帰ったばかりという親日家のヒンコフスキー・農学アカデミー院長が挨拶したが、ブッフエ式に盛合わせたテーブルの周りでみんながアベタイザーのワインを手に、がやがや話していると、頃合いを見て卓上の皿をちょっと直すような仕ぐさで、少し声高に何気なく話しはじめたのが、すなわち歓迎のことばなのであった。ワイン・レストランではブルガリア名物のヨーグルト、山羊チーズ、トマト・サラダ、ムーサカ（挽肉と野菜の炒めもの）等を平らげながら、ワイン、ウオッカ、ビールが飲み放題であった。

送別宴でも、ギリシャ風のドルマデス（ブドウ葉でくるんだ肉入り炒飯；前菜）、トルコ風のシシケバブ（肉と野菜の串焼き）などに舌鼓を打ちつつ美酒に酔い、しまいに、賑やかな音楽に合わせて全員がホールに踊り出て、思い思いのロックに興じながら、心ゆくまで中秋のバルカンの夕べを名残り惜しんだのであった。

科学アカデミーのこと：

今回のシンポジウムは、ブルガリアの科学アカデミーと農学アカデミーの共催で、実質的には前者に属する生物物理研究所が主宰していた。科学アカデミーは自然科学系研究センター6つと人文・社会科学系センター5つをかかえる大きな研究機構で、いわば科学系の国立研究所と国立大学院を兼ね合わせたような役割をもっているらしい。ブルガリアを代表する学術団体として、日本学術振興会とも交流プロジェクトをもっているというから、ご存知の方が多いかも知れない。一方、科学アカデミーから派遣されて日本を訪ねたことがあるという何人かの人たちにも出合った。

脂質シンポジウムの開催は、最初からずっとこの科学アカデミーの担当で、場所も同じバルナ（実際にはドルズバ）であったという。ついでに言うと、ほかの学術分野でも、科学アカデミー関係の国際集会はたいていこのドルズバの国際会館で行なわれる由である。

国柄のこと：

ブルガリアはヨーロッパの東南端バルカン半島にあり、面積約11万平方キロ、人口およそ880万、ほとんどがアジア系のブルガリア人である。ヨーロッパでは、ハンガリーと並ぶ2つの代表的なアジア系民族の国であると言ってよい。長くトルコの圧政に苦しんだがロシア・トルコ戦争で解放され、大戦後は人民共和国として親ソ方向で再生した。国内の生活、経済、文化などは概して東欧的であるが、西部の首都ソフィアや東部のリゾート地バルナなどではかなり西欧的な側面もある。東欧圏のなかでは比較的豊かなのであろう。工業化も盛んであるが、農業とくに葉タバコ、バラ（香水）、果物、野菜などを多産する。わが国でも、輸入のヨーグルト、いちご、ジャムなどで馴染みが深いはずである。

むすび

脂質ことに生膜脂質の研究は今や世界的な風潮であるが、われわれの耳目にとどく情報は、欧米圏からが主で東欧・アジア圏からはなかなか伝わって来ない。脂質研究を通じて、今はわが国にとって遠い国々にも、行くゆくは近い国々にとしたいものである。ブルガリアでのこの国際脂質シンポジウムは、次回は1990年に行なわれる。

国際PAF会議によせて

帝京大学薬学部 和久敬蔵

血小板活性化因子（PAF）は、1972年 Benveniste らにより命名された、好塩基球由来のケミカルメディエーターの一つであるが、1980年に Hanahan らによってその構造が最終的に決定されて以来、その多彩な生理作用とそのメカニズム、生合成と分解、レセプターとアンタゴニストなどに関する研究が、非常な勢いで進展しつつある。本年の第30回日本脂質生化学研究会では、F. Snyder 教授（アメリカ、オークリッジ）を招待して、PAFに関する特別講演及びシンポジウムの開催を企画しており、また、来年度の5月には、野島教授（帝京大・薬）の主催で、第3回のPAFに関する国際会議が東京で開かれる予定である。ここでは、これまでに開かれたPAFの国際会議について少し振り返ってみたい。

PAFに関する第1回の国際会議は、1983年6月に、Benveniste博士の主催でパリで行われたが、このときの参加者は100名程で、43の口頭発表がなされた。PAFの構造が決定されてまだそれほど間もない頃でもあり、PAFやPAF類似体の化学合成や、PAFの生合成機構に関する研究が多くみられた。人数は比較的少なかったが、こぢんまりした会場のせいか、討論は非常に熱気を帯びていたと記憶している。尚、このときには、PAFの構造決定者であるHanahanが、Benvenisteに反撥して出席せず、研究者同士の争いの厳しさをうかがわせた。

第2回の国際PAF会議は、1986年10月に、アメリカ合衆国テネシー州のガトリンバーグでSnyder教授主催の下で行われた。このときは、Hanahan教授も出席し、約300人の参加者を集め、80の口頭発表と110のポスター発表があり、なかなか盛会であった。第1回のときと比べると、喘息やエンドトキシンショック、腎炎などの実際の疾病との関わり合いを追求した報告が多くみられ、またPAFアンタゴニストに関する報告や、それらを用いた研究が多いのが目についた。更に、病的状態のみならず、発生、妊娠といった生理的な状況下でもPAFが関与しているという報告も幾つかあり、興味深いものであった。

いずれにしても、PAFの種々の生理的あるいは病理的な状況における意義をより明確にするためには、もう少し感度が高くかつ簡便なPAF定量法の開発や、より強力で

選択的な抗 PAF 薬の開発などが望まれるところであり、明年の国際 PAF 会議では、このような手法あるいは薬を駆使した研究により、PAF の役割が一層明らかにされることを期待している。

第 3 回国際 PAF 会議開催のお知らせ

来る昭和 64 年 5 月 9 日(火)より 12 日(金)の 4 日間、笹川記念館(東京・品川)におきまして、第 3 回国際 PAF 会議(Third International Conference on platelet-Activating Factor and Structurally Related Alkyl Ether Lipids)が野島庄七先生(帝京大学・薬学部)を組織委員長として開催される予定であります。

御存知のとおり、血小板活性因子(platelet-Activating Factor, PAF)は 1972 年、ウサギ好塩基球から活性化に応じて産生・分泌されることが発見され、1979 年に構造決定されて以来、新しいタイプの脂質メディエーターとして生体において重要な役割を演じている可能性が指摘されてまいりました。第 1 回バリ、第 2 回ガトリンブルグ(米国)に続いて第 3 回目の国際会議が東京で開催されることになりましたので、皆様の御協力よろしくお願い申し上げます。First Circular の作成は本年 4 月頃を予定いたしております。

御問いあわせは、野島庄七先生(〒199-01) 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐 1091

帝京大学・薬学部, Tel. 04268-5-1121)

または井上圭三(〒113 文京区本郷 7-3-1 東京大学・薬学部

Tel. 03-812-2111 内線 4720)

までお願いいたします。

国際会議のお知らせ

LIPID FLOW

ADVANCED COURSE
MARCH 6-12, 1988

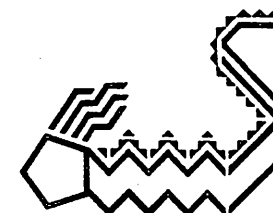
F E B S

MARIA ALM, SALZBURG, AUSTRIA

Scientific Program

lectures;
poster sessions and discussions on
mobility, localization, transport and
intracellular sorting of simple and complex lipids;
lipoprotein and cholesterol uptake;
intracellular membrane traffic;
membrane fusion;
lipid synthesis and functional aspects of specific lipids

Information: J.A.F. Op den Kamp
Biochemistry Department
University of Utrecht
Padualaan 8, 3584 CH Utrecht
The Netherlands



台北前列腺素
白三烯素研究會

TAIPEI CONFERENCE ON PROSTAGLANDIN AND LEUKOTRIENE RESEARCH

Taipei, Taiwan, R.O.C.
April 22-24, 1988

Address all enquiries to:
The Organizing Secretariat
Taipei Conference on Prostaglandin and Leukotriene Research
P.O. Box 1-12
Nankang
TAIWAN, R.O.C.
Tel: (02) 782-3047 Ext. 62
Fax: (02) 782-5573
Cable: SINACADEMY

CHOLESTEROL METABOLISM

AN INTERNATIONAL SYMPOSIUM

IN MEMORY OF THE 90TH BIRTHDAY
OF RUDOLPH SCHOENHEIMER

THURSDAY-SATURDAY
MAY 12-14, 1988



A private university in the public service
550 FIRST AVENUE, NEW YORK, N.Y. 10016

A Unique International Conference

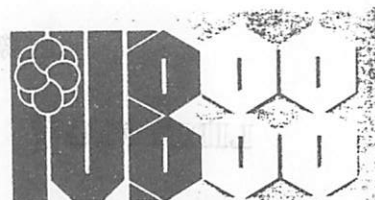
Diet, Lipids & Cancer
May 22-26th, 1988
Yulara: Ayers Rock
Australia

SECRETARIAL:
DR. JOHN TAYLOR
NUTRITION RESEARCH
INSTITUTE
CLIVE STREET, LA TROBE
AUSTRALIA
TEL: 03 9377 7744
FAX: 03 9377 7744

The views and counter-views of
specialists from a wide range of
disciplines — epidemiology,
physiology, endocrinology,
biochemistry, metabolism,
membranology — will focus
attention on the role of nutrition in
the prevention, management and
treatment of human cancer. Full
participation by a maximum of 300
registrants will be actively
encouraged through a wide range
of presentation styles — lectures,
discussions, debates, posters.
This four day conference is to be
held at the oldest rock formation in
the world — Ayers Rock — in the
very heart of Australia and the
conference coincides with other
scientific meetings within Australia
in related disciplines and with
Australia's Bicentenary
Celebrations.

DIET, LIPIDS
AND CANCER
MEETING
NUTRITION RESEARCH
INSTITUTE
CLIVE STREET, LA TROBE
AUSTRALIA
MAY 22-26, 1988

下記の旅行社が扱うそうです。
ご連絡ください。
近畿日本ツーリスト
虎の門海外
03-502-2921 (中村 博行)



Prague, Czechoslovakia
July 10-15, 1988

14th International Congress of Biochemistry

CORRESPONDENCE

Please address all correspondence to

14th International Congress of Biochemistry
166 50 Prague 6
Czechoslovakia

多数の旅行社が参加者を募って
います。前記、近畿日本ツーリ
ストも扱う由です。



29th International Conference on the Biochemistry of Lipids

September 19-22, 1988
Tokyo, Japan

Correspondence:

29th ICBL
c/o Prof. Y. Seyama
Department of Physiological Chemistry
and Nutrition,
Faculty of Medicine, University of Tokyo,
Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan

(03) 812-2111 ext. 3495

THE THIRD INTERNATIONAL RINSHO-KEN CONFERENCE

"Biomedical Significance
of Glycolipids"

東京都臨床医学総合研究所は創立10周年を記
念して昭和61年より毎年 Rinsho-ken Interna-
tional Conference を行うことになり、昭和61年
度は Platelet Activation、昭和62年度は Regula-
tion of Cell Growth のトピックで、それぞれ盛会
裡に終了いたしました。

昭和63年度は Biomedical Significance of Glyco-
lipids のテーマで9月26日(月)より28日(水)まで
の3日間東京都文京区湯島の東京ガーデンパレ
スにて開催いたします。このカンファレンスに先
だち9月19日(月)より22日(木)までの4日間、
市ヶ谷の日大会館にて International Conference
on the Biochemistry of Lipids (ICBL) が開催され
ますが、それには講演セッションのトピックとし
て糖脂質は含まれておりません。本カンファレン
スはそれを相補う意味も含まれております。

なお、参加費は5000円を予定して居りますが、
会場の関係上先着250名までになります。

事務局 (お問い合わせ)

〒113 東京都文京区本駒込 3-18-22

東京臨床医学総合研究所

TEL 03-823-2101 内線 5463 鈴木 明身

1988 年 世界油化学会 要

- 国際会議の名称
和 文 名: 1988 年世界油化学会
英 文 名: ISF-JOCS WORLD CONGRESS 1988 (The 19th World Congress of The Inter-
national Society for Fat Research [ISF] and The 27th Annual Meeting of The
Japan Oil Chemists' Society [JOCS])
- 主 催 The International Society for Fat Research
(社) 日本油化学協会
- 日 期 昭和63年(1988年) 9月26日(月)~28日(水)の3日間
会 場 虎ノ門パシオナル(東京都港区虎ノ門)
〒105 東京都港区虎ノ門4丁目 1-1 (虎ノ門地下鉄駅 徒歩7分)
- 主 題 次の35議題(Topics)に分け、各議題ごとに招待講演(Season lectures)と研究発表(Oral pre-
sentation, Poster presentation)を行います。
1. Oil seeds and fat resources
 2. Processing of oil and fat including environmental aspects,
quality, and energy conservation
 3. Biochemistry, nutrition, and clinical aspects of lipids
 4. Industrial and edible oils and fats
 5. Chemistry of oils and fats and their derivatives
 6. Surfactants and surface chemistry
 7. Analysis of lipids
 8. Bionotechnology
 9. Vegetable proteins
 10. Miscellaneous (Marine oil, etc.)

参 見 先 〒100 東京都中央区日本橋3丁目 13-11 和成工業会館7階 和成会館 日本油化学協会事務局

《備考》 本会館の Second Circular が用意されておりますので、この要の方はお申し送りください。

組織委員長 野島庄七

第29回ICBL（国際脂質生化学会議）がいよいよ本年9月に開催されることになりました。一昨年の秋以来開催準備のために組織委員会をつくり、鋭意努力して参りましたが、本年1月にはSecond Circularを配布することができ、これから参加登録が始まるという段階を迎えることができました。所期の予定通りの進捗状況であり、レベルの高い充実した国際会議実現に向け更に一層の努力をしていく所存であります。

ちなみに、昨年9月にFirst Circularを配布したところ、12月末の段階で、400通にのぼるレスポンスをいただき、約500名の方々にSecond Circularを発送いたしました。外国からは27カ国、280名に及んでおります。

既に多くの方はSecond Circularを受け取られて、会議の内容についてご存じとは思いますが、念のために概要をご紹介します。会期は9月19日（月）から22日（木）までで、19日は受付とPlenary Lectures、20日から22日の3日間が講演及びポスター発表となっております。

今回取り上げましたテーマは、1. Biological Significance of Phospholipases、2. Biogenesis of Membrane Lipids、3. Nutritional Aspects of Lipidsの3つですが、ポスター発表ではこれ以外の領域に関するものも採用する予定です。従来からのICBLの慣例によりまして、口頭発表の数が非常に限られておりますので、申し込まれた演題の大部分がポスター形式の発表をお願いすることになりますが、この点ご了承を願いたいと思います。

なお、この会議に関するお問い合わせは今後下記にお願い致します。

〒113東京都文京区本郷2-40-14 日本学会事務センター
電話 03-817-5831（担当 轟、坂下）

私が脂質と取り組むようになったのは、1年程前からです。このような浅学未熟の輩が『脂質』考とは、笑止千万ですが、素人の発想として口頭考えていることを書きなぐってみたいと思います。

生体物質としての脂質のユニークさは、反応の場の形成という点にあると思います。例えば、血液が凝固する機序は、血液中に前駆体として存在する酵素群が、次々と活性化されるカスケード機構として知られています。血液の凝固は、血管の損傷という非常事態に対する生体の防御反応であり、緊急を要するとともに、損傷部位に限定された反応でなければなりません。このような要請にこたえているのが、血小板に由来するリン脂質や、組織トロンボプラスティンという外因系凝固の引き金因子を構成するリン脂質であろうと言われています。すなわち、これらのリン脂質の存在が、一連の酵素反応の加速化と反応の場の局在化に深く関与しているようです。又、脂質が構成する細胞膜は、膜の内外で、物質やエネルギーを不均一化し、それを安定に保持するという反応の場の形成に重要な役割を担っています。このように、脂質は反応の場を提供したり、反応の場を局在化し限定するという環境因子として重要な側面をもっているように思われます。次に、脂質のもつ新しい機能として、情報伝達に関与するイノシトールリン脂質や、生理活性物質としてのプロスタグランディンやPAF（血小板活性化因子）が脚光を浴びています。これらの機能脂質は、酵素のように直接、反応に関与するというよりは、新たな反応場の形成を促進することによって、反応を制御しているように思います。このように考えていくと、脂質は単に受動的に反応の場を提供しているのではなく、それ自身あたかも意志をもっているが如く、より能動的に自発的に、反応場を創出しているように感じられます。このような環境因子としての脂質の研究方法は、大変難しいと思います。タンパク質のように、生体の中から物質を単独に切り離して、構造や機能を解明していくような分析的な方法では、本当の姿は促えられないのではないかと思います。生体の中で起こっているストーリーを常に考慮して、動的に見ていくような独創的な方法が求められているように思います。

イノシシの皮下脂肪

N, U 生

ご存知のように、ブタの皮下脂肪組織の中性脂肪の脂肪酸配列は、他の動物と異って2位に飽和脂肪酸、殊にパルミチン酸がはいって居ります（表をご覧ください）。

新宿の雑踏を歩いている時に、ブタがそうならイノシシはどうだろうと、フト思いました（不勉強のいたりで、そんなことはとっくの昔に分析した人が居ました。表の中のMattsonの文献をご参照ください）。何故、そんなことを雑踏の中で思ったかといえは、東京をご存知の方はわかりと思いますが、新宿大ガードの近くに、栃木屋というイノシシ肉を食べさせるお店があったからでしょう。日は既に没して頃合いはよし、イノシシの皮下脂肪を手に入れて、分析してみようと思ったのです。浮かぬ顔の友達の脊を押して大ガードをくぐって、あれ！ 栃木屋がない！ 栃木屋は確かイッパイ飲み屋風の木造平屋で、季節になると時にはイノシシがぶら下げてあったのに！。栃木屋のあった辺りにはピカピカのビル、イノシシのぶら下って居た辺りのショーウィンドウには毛皮のコートを羽織った女性のマネキン人形が婉然とほほ笑んでいるではありませんか。ない！ 栃木屋がない！ と思ってビルの横にまわったら、地下に下りる階段に栃木屋の看板がありました。階段を下りてみると、いっぱい飲み屋の風情はどこへやら、料亭風とまではいきませんが、ピカピカの栃木屋がありました。とにかく扉をおして店内へ、テーブル席について、ビールとイノシシを注文しました。イノシシはジンギスカン風に焼いてタレをつけて食べます。店のオヤジサン（ピカピカの雰囲気からはマスターといわなければいけないのかな？）に“すっかりお店、変っちゃったね” “そう、固定資産税高過ぎるもんね” “イノシシの皮下脂肪が欲しいんだけど” “何すんの？” “一寸、調べたいんだ” “切り傷、ヤケドによく効くんだよ” “フム、フム、でもイノシシは本物？ まだ居るの？” “本物さ、獲れたらちゃんと連絡があつてね。” ということで5g程の皮下脂肪を入手することに成功しました。この文章には資本がかゝっています。

さて、イノシシの皮下脂肪より脂質を抽出中性脂肪を簡単に精製してブタの腓リパーゼで加水分解、5分、10分、30分、60分、120分、240分と分解産物をTLCで展開、1,2-ジアシルグリセロール、1,3-ジアシルグリセロール、モノアシルグリセロール

(MG)、遊離脂肪酸(FFA)の脂肪酸組成をGLCで調べました。このようにして、中性脂肪の脂肪酸の位置を決めてゆくことにも決して問題なしとは思いますが、表にあるように、残るモノグリセリドの構成脂肪酸は圧倒的に飽和で、しかも、パルミチン酸でした。

	2位(β位)の脂肪酸 皮下脂肪の中性脂肪*					イノシシの皮下 脂肪中性脂肪の リパーゼ分解物		
	豚脂	牛脂	羊脂	サフラワー 豚脂	豚肝の 中性脂肪	MG	FFA	TG
14=0	5	8	6	2	1	5.6	0.9	12.0
16=0	72	14	14	36	12	77.2	12.6	28.0
18=0	4	8	8	3	4	4.2	21.1	14.1
計	(81)	(30)	(29)	(41)	(17)	(87.0)	(34.6)	(54.1)
16=1	4	6	5	2	6	—	2.7	3.3
18=1	12	61	58	12	63	0.1	50.4	41.0
18=2	3	3	6	42	1	0.2	6.7	5.0
18=3	0	0	2	2	2	—	1.8	1.6
20=4					1	3.3	0.2	0.3
22=5						9.5	3.6	4.8

* F. H. Mattson et al ; J. Lipid Res. 5 363~365. (1964)

** R. Anderson et al ; Lipids 5 171~175. (1970)

皮下の脂肪細胞中の中性脂肪は、末梢血管中のリポ蛋白質リパーゼによって加水分解されたキロミクロンやVLDLの脂肪酸が原料であり、脂肪細胞中で合成されます。

一般に動物のグリセロ脂質では、この2位には不飽和脂肪酸のあるものが多く、1位には、飽和脂肪酸のあるものが多いということもよく知られています。中性脂肪については表で見たとおりですし、ホスファチジルコリンでも例えば、1位はステアリン酸、2位にはリノール酸の結合しているものが代表的な形の一つであり、合成の段階でのアシルトランスフェラーゼの基質脂肪酸の好みも、それを裏づけているようであります。

なぜ、ブタとイノシシの皮下組織の脂肪細胞では他の動物とは違っているのか、どなたかご存知の方が居られたら教えてください。多分、中性脂肪の合成段階でのアシルトランスフェラーゼの基質特異性が、ブタでは違っているのだと思いますが、それにしては、たかだか25%のサフラワーオイル入りの餌料で、2位の脂肪酸のパルミチン酸がリノール酸に大量に入れ替ってしまうのも、何とも惜けない話です。

ところで、こんな話を例の栃木屋のオヤジサンから聞きました。或る時、母イノシシを射って、子イノシシを何匹も捕えたそうです。それを近所の何軒かの農家で飼育してもらったそうです。大きくなればイノシシ狩りをしないでイノシシが手に入ると考えたそうです。“そしたらダメだったね、ブヨブヨの肉の締らないイノシシが出来ちゃってね。”“餌は何をやっていたの”“ブタを飼っていた農家だからブタと同じものをやっていたんだって。やっぱりイノシシは、山や谷の地面を鼻づらで掘じくり返して、根っ子や虫を食べて走りまわっている奴じゃないとダメなんだよね。”

こんな話を聞くと、モノの本に書いてあるように、人類は非常に早い時期にイノシシを家畜化してブタを作ったというのが本当のように思えます。イノブタが出来るのですから非常に近縁なのでしょう。しかし、日本のイノシシと、ヨークシャ種の白い短毛のブタを見較べてみると、サルとヒトとの違い程にも見えます。どのくらいの年月飼って、イノシシがブタになったのでしょうか。どのくらいの年月で我々裸のサルが出来上ったのでしょうか。

編 集 後 記

今年も発行が遅れたことの言い訳をしなればいけません。例年より、新年ボケからの立ち直りが遅かったせいだと思います。いっそのこと、来年から発行日を2月15日にして頂こうかとも思っています。

何はともあれ、今年は第30回の研究集会です。併ってご参加下さい。

事務局